『月報』創刊号の思い出

研究参与　加 藤　幸 三 郎

いま、(発行者　山田盛太郎)「№.１」(1963・10・１)と記された『月報』を前にして、いろいろな感慨がよぎる。

冒頭｛再発足記念の会｝では、当時の相馬勝夫学長の「挨拶」が掲載され、続いて山田先生の「再発足の経緯」が収録されている。いわゆる「高度成長期」を背景に「社研再発足の位置が規定される」とし、もともと社研は、昭和24年の創立にかかわり、その後休止状態にあったが、『小林良正博士還暦記念論文集』執筆の陣容の中に、「共同的な研究事業に対する自覚と自信とが培われることになり、自然発生的に一つの研究集団が形成されてきた。その起動力をなしたものは、寧ろ、若い研究者層であった」と。初代事務局長の長幸男さんも「構造研から社研再発足へ―事務局の弁―」を、それに吉沢（会計)、玉垣（資料)、山田克巳（統計)、望月（購入）の分担であった。

さらに、江沢譲爾先生の「工業集積の形態と理論」なる、現在でも高い評価が与られている論考が掲載され、また「専修大学社会科学研究所の部門構成」も規定されている。そして、最後に、新米の私が「編集後記」を書いているのである。

ところで、『月報』で最初にして最後（？）というのは、言いすぎとしても、この『月報』冒頭のページに「グラフ」が収録されている。さきの「高度成長期」を示現するものであるが、これは「切抜」担当の森田桐郎氏の作成にかかわる。どういう経緯であったか思い出せないが、森田氏らしい発想とおもう。話はとぶが、1990年代だったろうか、社研で早朝の「東京魚市場」見学実施の前夜の懇親会に、珍しくひょっこり森田氏が現れた。久闊を叙したわけだが、その後、森田氏は「腎臓透析」の手当ても空しく逝かれた。

ともあれ、大学の応援や山田先生の指導力で、社研活動－ひいては「月報」編集も軌道に乗るわけなのであるが、遅速や厚薄はあれ、コツコツと「500 号」まで継続してきたのは、歴代の社研事務局の努力の結晶というべきであろう。「身近か」で、手っ取り早く投稿出来る強みも見逃せまい。事務局の地道な努力を今後に期待して「お祝いの言葉」としたい。